

「どうだ、伊策。そろそろお前も、そろばんをやってみるか。」

兄に声をかけられた伊策は、自分も一人前に認めてもらえたような喜びを感じました。

「お前も知っているだろうが、わが家は昔から名主のうちでも、そろばんの仕事を受けもってきている。土地の広さや、米のとれぐあい、年貢の割合などの計算を仕事としてきたのだ。だから、祖父も父も、私もそろばんを手離したことはない。お前もこの家の一人として、そろばんをやってみないか。私が教えてやるから、どうだ、やってみるか。」

そのころの小学校は、江戸時代の寺子屋のつづきで、勉強することは、「読み書き・そろばん」といわれていました。伊策は、学校で習ったそろばんよりも、兄に教えてもらった方が強く印象に残っていました。それだけ、兄の教え方はきびしく、後の伊策の役に立つそろばんだったのです。